

統計から見た学校図書館

Statistical Survey of Showa High School Library in Tokyo

大 越 朝 子

Asako Ogoshi

Résumé

The author, the librarian, shows the reading trend of students in her school library which symbolizes the general trend of reading habits of high school students in this country. The author has analyzed circulation records of the last ten years between 1962 and 1971 and compared difference of reading tastes between boys and girls by subjects and by grades.

The survey shows that the reading tastes of the girls is inclined to humanities particularly to the field of pure literature while that of boys spreads over various subject fields. In conclusion, the author stresses the need of reinforcement of the library resources to meet increasing demands of integrated studies.

数字は魔術だともいわれる。数字が細くなればなる程そこに述べようとするのがさも真実に近く思われるからであろうか。以下、貸出統計を中心に数字によって、高校生 of 図書館利用の現状と問題点を述べてみようと思うが、これは一つの試みであって、すべてではないことをまずおことわりしておきたい。

学校図書館の現状を語るにも、人の問題を中心にする場合も、又設備・予算・資料の上から語る場合も、利用者を中心にする場合もある。ここでは一番最後を問題にしたいので、前者については簡単にふれたい。

学校図書館界では現在何と云っても人の問題が中心に議論されている。いわゆる学校図書館法改正案が去る6月に衆議院文教委員会で可決され、次の国会で継続審議されようとしている。その問題点は、教育職で校務として学校図書館の仕事をする司書教諭が、行政職で、資料の整理と保存の図書館の専門的事務をする学校司書（大

卒司書有資格者から高卒無資格者まで可能）を指示（監督が指示に修正された）するという点にある。学校図書館の仕事が教育と事務に分けられるものなのか。専門職が非専門職の指示をうけて仕事をするとはどういうことなのか……問題はいくつもある。「図書館に人が欲しい」だけが前面に出て、いたずらに現場に混乱をまねくことのないよう、学校図書館の果す役割を考えるとどんな人が必要なかを法にすべきだと思う。この問題については、「図書館雑誌」Vol. 66, No. 8 1972年8月号や「現代の図書館」Vol. 10, No. 2などに詳しいのでそれらを参考にさせていただきたい。

次に設備や予算面では、東京都の場合は均一化されている。図書室の広さは学級数できまり（24学級で2.5教室分、27学級で3.5教室分）、今のところ書庫は規準に入っていない。予算は全額都費になり、大体100万円前後が、学校全体にくる備品費（3,000円以上の本は備品）

大越朝子：東京都立昭和高等学校司書教諭

Asako Ogoshi, School Librarian, Tokyo Metropolitan Showa Senior High School.

統計から見た学校図書館

と一般需要費の中から、他の施設の充実度や、図書館への理解度などから、年間予算として認められている。東京都には専任の司書教諭（43年以後は採用試験中止のまま10数校で事実上の欠員が生じている。）と学校司書（短大卒司書有資格者）を中心に図書部又は図書委員会で図書館は運営されている。このように東京の高校の図書館は貧弱なほほ同じ外観の中で、それぞれの個性を出しつつ活動しているといえる。

ではその中で生徒はどうなっているのか、を少し数字を中心に述べてみよう。書き出しにも書いたように、この数字の示すものが本校の生徒の図書館利用のすべてで

はない。しかし日常感じている変化や、こちらが陰でやっている試みへの反応を少しは具体的に知ることができるのではないかと思う。

1. 館外貸出しよりみた、男女別、分類別読書傾向

館外貸出しは学校図書館では利用の一部にすぎない。特に、図書館を利用する授業やレポート提出が増えれば増える程、館内利用のみに留める本が多くなり、図書館の利用が活発な割に貸出し冊数は減少するということが起きている。

表 1 昭和37年度～46年度分類別館外貸出し

年度	分類											計
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
男	37	24 ₂	85 ₆	263 ₁₉	62 ₅	297 ₂₂	13 ₁	0 ₀	28 ₂	107 ₈	466 ₃₅	1345冊 100%*
	38	48 ₃	111 ₆	296 ₁₈	81 ₅	293 ₁₇	20 ₁	9 ₁	69 ₄	65 ₄	683 ₄₁	1675 100
	39	89 ₅	111 ₆	259 ₁₃	70 ₄	288 ₁₅	33 ₂	9 ₀	73 ₄	89 ₄	910 ₄₇	1931 100
	40	74 ₃	139 ₆	259 ₁₂	166 ₇	257 ₁₂	72 ₃	1 ₀	189 ₉	105 ₅	954 ₄₃	2216 100
	41	54 ₂	106 ₅	349 ₁₆	190 ₉	274 ₁₂	55 ₂	9 ₀	150 ₇	69 ₃	989 ₄₄	2245 100
	42	44 ₃	99 ₆	322 ₂₀	132 ₈	180 ₁₁	70 ₄	5 ₀	106 ₇	34 ₂	643 ₃₉	1635 100
	43	25 ₂	82 ₆	138 ₁₀	114 ₉	214 ₁₆	47 ₃	4 ₀	115 ₉	52 ₄	559 ₄₁	1350 100
	44	41 ₂	60 ₃	159 ₈	212 ₁₁	433 ₂₂	70 ₄	8 ₀	270 ₁₄	49 ₂	657 ₃₄	1959 100
	45	75 ₄	130 ₆	214 ₁₀	172 ₈	412 ₁₉	46 ₂	21 ₁	256 ₁₂	30 ₂	786 ₃₆	2142 100
	46	46 ₂	124 ₆	153 ₈	120 ₆	310 ₁₅	66 ₃	13 ₁	273 ₁₄	38 ₂	872 ₄₃	2015 100%
女	37	25 ₁	57 ₃	165 ₉	68 ₄	157 ₈	22 ₁	1 ₀	45 ₂	43 ₂	1377 ₇₀	1960冊 100%
	38	31 ₁	127 ₅	222 ₉	83 ₄	156 ₇	51 ₂	12 ₁	58 ₂	61 ₃	1577 ₆₆	2378 100
	39	29 ₁	138 ₅	258 ₉	53 ₂	122 ₄	28 ₁	9 ₀	54 ₂	76 ₃	2093 ₇₃	2860 100
	40	71 ₂	178 ₅	258 ₈	99 ₃	126 ₄	33 ₁	1 ₀	70 ₂	35 ₂	2416 ₇₃	3287 100

分類 年度	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
	子	41 26 1	130 4	273 9	200 7	164 5	51 2	7 0	114 4	50 2	1995 66
	42 14 1	50 2	206 10	121 6	77 4	10 1	4 0	66 3	22 1	1450 72	2020 100
	43 28 1	81 4	107 6	184 9	97 5	29 1	4 0	97 5	30 2	1324 67	1981 100
	44 39 1	83 3	227 8	293 10	166 6	21 1	6 0	137 5	33 1	1918 65	2923 100
	45 61 2	124 4	261 8	169 5	279 9	46 2	13 0	153 5	47 2	1974 63	3127 100
	46 32 1	104 4	182 7	132 5	196 7	74 3	15 1	150 6	33 1	1716 65	2634 100%
計	37 49 2	142 4	428 13	130 4	454 14	35 1	1 0	73 2	150 4	1843 56	3305冊 100%
	38 79 2	238 6	518 13	164 4	449 11	71 2	21 1	127 3	126 3	2260 55	4053 100
	39 118 3	249 5	517 11	123 3	410 8	61 1	18 0	127 3	165 3	3003 63	4791 100
	40 145 3	317 6	517 9	265 5	383 7	105 2	2 0	259 5	140 2	3370 71	5503 100
	41 80 2	236 5	622 12	390 7	483 8	106 2	16 0	264 5	119 2	2984 57	5255 100
	42 58 2	149 4	528 14	253 7	257 7	80 2	9 0	172 5	56 1	2093 58	3655 100
	43 53 2	163 5	245 7	298 9	311 9	76 2	8 0	212 6	82 3	1883 57	3331 100
	44 80 2	143 3	386 8	505 10	599 12	91 2	14 1	407 8	82 2	2570 53	4882 100
45 136 3	254 5	475 9	341 6	691 13	92 2	34 1	409 8	77 1	2760 52	5269 100%	
46 78 2	228 5	335 7	252 5	506 11	140 3	28 1	423 9	71 2	2588 55	4649 100%	

* 各年度下欄の数字は百分率で示したもの。

わかりやすくグラフにすると表2のようになる。

10年間の貸出し統計をみて全く毎年変わらないことが2つある。男女比が2:3であることが一つ。本校は男女半々なので、この数だけから判断すれば男子よりも女子の方が読書家であるといえる。もう一つは、女子は文学好きということ。39年の73%を最高に低いときでも63%が文学になっている。男子も文学が40%前後と、全体での割合は高いが、自然科学、歴史、社会科学、芸術あた

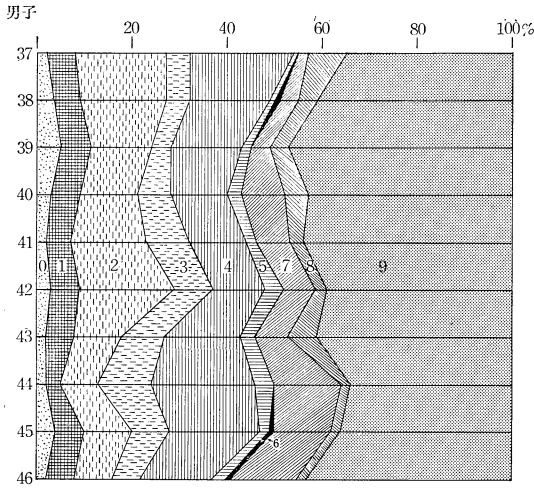
りに平均に高い利用率を示している。

女子の個人読書カードを見ると、ほとんどが文学に集中し、その間に他の分野のものが散見されるといったものが多く個性がない。それに比べると男子の個人読書カードは、昆虫とか天文、ラジオ、車、歴史関係といったものを一人が徹底的に読む傾向がある。

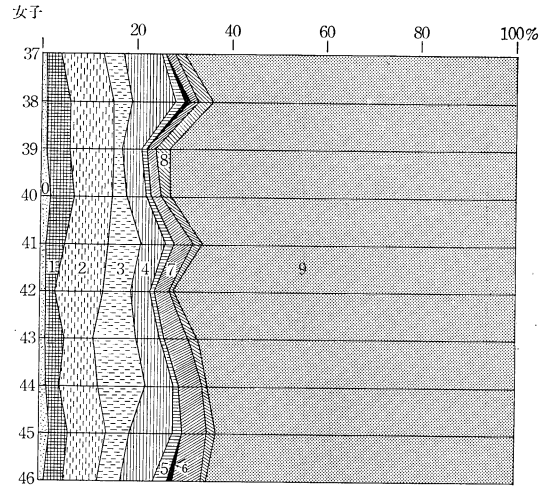
一般に女子は進学する場合も文学部が多い。それが必ずしも女子の特性だともいえないので、女子にも幅広い

統計から見た学校図書館

表 2 男子



女子



読書をするようすすめると同時に蔵書構成の上でも文学偏重を修正するように努力している。

蔵書数と貸出し冊数の相関関係を細く分析してみると面白い結果が出るかもしれないが、一応ここでは、利用率が蔵書構成と無関係ではないということを示す程度にとどめる。

昭和37年以前（私が着任する以前）のことは統計が残っていないので分らないが、今残っているもの（引きつぎのときから二三年で使用に耐えないものは廃棄した）の割合は表3のようである。

総記が多いのはやたらと全集を入れていたためと考えられ、歴史が多いのは、図書系の教諭が代々社会科が多かったことが原因していると思われる。

さてその後10年、特にはっきりした蔵書計画もないま

ま、できる限り多くの先生、生徒の要求を入れて購入したのが次の表4である。

総記・文学・歴史を押えぎみにして、自然科学関係を充実させた。本校は普通科のみ的高校で、おのずから、工業・農業・商業高校とは異った蔵書構成になっている。創立（昭和24年ごろから本が入りはじめた）以来の蔵書構成は表5のようになる。

又10年間の全貸出し冊数とその割合は表6のようになる。

表3の蔵書構成と表1の計の37年度の関係には17%の蔵書に対して2%の利用、21%に対し、13%、逆に4%の自然科学に14%の利用があるなど蔵書構成と利用者の要求の間にアンバランスなものがある。その点表5と表6の関係はよくなっていると思われる。

表 3 昭和24年～36年3月31日の蔵書構成

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
293 17	14 1	376 21	69 4	112 6	32 2	22 1	121 7	42 2	690 39	1771冊 100%

表 4 昭和37年度～46年度購入図書

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
577 7	458 6	1214 16	956 12	998 13	271 3	74 1	672 9	304 4	2234 29	7758冊 100%

表 5 昭和24年度～昭和46年度の蔵書構成

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
870 ₉	472 ₅	1590 ₁₇	1025 ₁₁	1110 ₁₂	303 ₃	96 ₁	793 ₈	346 ₄	2924 ₃₀	9529冊 100%

(注) 47年3月31日現在の登録冊数は14,380冊

表 6 昭和37年度～46年度貸出し総数

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
867 ₂	2119 ₅	4571 ₁₀	2721 ₆	4498 ₁₀	857 ₂	151 ₀	2473 ₆	1068 ₂	25359 ₅₇	44693冊 100%

表 7 昭和37年度～46年度学年別貸出し

学 年 度	1 年			2 年			3 年			合 計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
37	449	760	1209	602	626	1228	294	574	868	3305冊
38	734	879	1613	556	1026	1582	385	473	858	4053
39	648	1082	1730	1026	1216	2242	257	562	819	4791
40	747	952	1699	943	1625	2568	526	710	1236	5503
41	696	709	1405	1046	1285	2331	503	1016	1519	5255
42	446	563	1009	526	759	1285	663	698	1361	3655
43	364	565	929	667	737	1404	319	679	998	3331
44	1034 - 168	1067 - 176	2101	515	1072	1638	415	779	1194	4882
	866	891	1757							4532
45	807 - 188	965 - 193	1772	967	870	1837	368	1292	1660	5269
	619	772	1391							4888
46	751 - 190	850 - 188	1601	652	1035	1687	612	749	1361	4649
	561	662	1223							4271

2. 館外貸出よりみた、男女別、学年別読書傾向

次に3年間の高校生活における読書量の変化をみてみよう。(表7)

上の表は10年間の学年別男女別貸出し冊数である。44年度からは、オリエンテーションの時1年生に全員貸出しをしているので、ここではその分を差引いて考える。なおこの全員貸出しの効果は、それを除いても卒業時に1冊も借りなかったという生徒が、ずっと減ったことから、貸出し手続きが分らないとか、何となく図書館の本はとりつきにくいということから解放され、図書館に

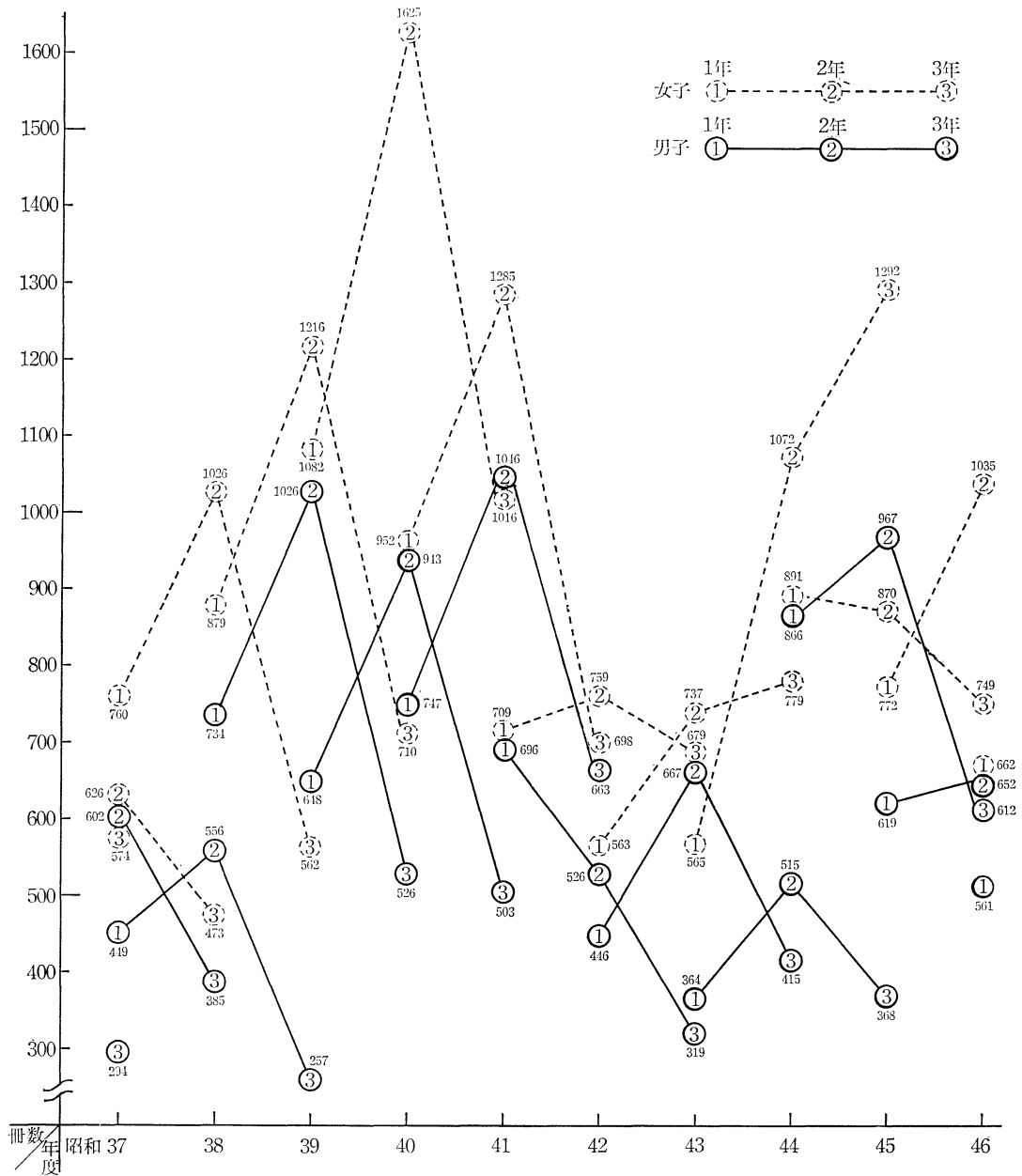
来やすくなっているようである。

さて生徒数に増減があるのでこのまま冊数を比較しても無意味であるのでこの数字を少し並べかえて、一人の生徒(ある学年)が学年がすすむにつれてどう変化するかをみてみよう。(表8)

このグラフは、同じ人数の生徒が1年に入ったときはまだ慣れず、問題意識も低く、あまり借らないが、2年生になると学校にも慣れ余裕も出来、学校の中心として活動するので意欲もわき貸出しものびるということが分る。それが3年(特に男子)になると激減するのが大きな特徴である。男子はほとんど全員が大学進学希望で、

統計から見た学校図書館

表 8



3月まで図書館に日参していた子が4月になると、ぼったり来なくなる現象に、大学入試がいかに重くのしかかっているかが分る。女子も進学希望者がほとんどであるが、中には2学期に就職がきまったあと、高校生活中で最ものおんぴりと読書に専心する生徒がいるのも事実だ。

44年度、45年度の3年の女子が2年のときよりものびているのは、高校紛争と、その後の教育課程の変化に大いに関係がある。紛争は多くの問題を提起したが、教育とは何かが根本から問い直されたことは大きな収穫であった。本校でも、理科系文化系のコース制がなくなり、

必修科目が99単位から85単位になり残りは自由選択に変わった。ほとんどの教科にゼミナール形式の選択講座が置かれ、レポート提出による評価も多くなった。したがって、上のような表には表わせない利用が非常に多くなって来ている。おそらく0（百科事典の利用が多いので）の貸出しはトップにのしり、本校では館内利用のみにしている参考図書の貸出しが館外貸出しを上まわると思われる。

3. 授業形式の変化と図書館利用

生徒は確かに授業中や、教科学習のために図書館を多く利用するようになった。しかし十分な準備なしの授業の変化や、他教科との関連を考えないレポート合戦が、いかに生徒を苦しめ、いいかげんな百科辞典の丸うつしに追いやっているかをもっと学校全体で考える必要がある。準備として最も大切な図書館資料の充実、具体的に言えば予算増額は全く考慮されず、前年度+物価値上り分（すべて含めて113万）にとどまった。

資料不足は致命的であり、利用のさせ方にも非常に苦勞がある。その1例として保健の授業を図書館でやったあとの生徒へのアンケートにその姿をみてみよう。

保健は3年生1クラス週1時間、2学期3学期をほとんどすべて図書館に来て、自分の選んだテーマにそって、資料を見つけ、調査研究し発表する形式をとる。

単元は、労働衛生、環境衛生で、PCBやイタイタイ病をはじめとする公害、職業病、婦人労働、異常心理など範囲は広く、しかも掘り下げた研究をする、とても高校生向きの資料では役立たない。

アンケート結果 (218名)

1. 図書館の資料を利用したか

した	138 (64%)
しなかった	54 (25%)
2. 資料の量・質について

十分	8 (4%)
まあまあ	54 (25%)
足りない	150 (69%)
3. 目録の検索について

目録をひいた	87 (40%)
ひかなかった	103 (47%)
4. 資料の不足をどうおぎなったか

自分で購入	52 (24%)
公共図書館の利用	93 (43%)
先生から借りた	43 (20%)

- | | |
|----|----------|
| 自作 | 57 (26%) |
|----|----------|
5. レポートの作成にあたって

今までに書き方を教わったこと	<table style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>ある</td> <td>11 (5%)</td> </tr> <tr> <td>ない</td> <td>196 (90%)</td> </tr> </table>	ある	11 (5%)	ない	196 (90%)
ある	11 (5%)				
ない	196 (90%)				
レポートの書き方を教わる必要性	<table style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>ある</td> <td>111 (51%)</td> </tr> <tr> <td>ない</td> <td>92 (42%)</td> </tr> </table>	ある	111 (51%)	ない	92 (42%)
ある	111 (51%)				
ない	92 (42%)				
 6. 指定図書（保健に関係するものは館内利用のみにし、やむを得ない場合のみ一夜貸しをする）について

知っていた	145 (67%)
知らなかった	63 (29%)
指定した方がよい	117 (54%)
一夜貸しもやめるべき	24 (11%)
平常貸出しを望む	17 (8%)

この結果をまとめてみると、 $\frac{1}{4}$ の生徒は毎週図書館に来ながら、資料がないため、他の教科の内職をしたり、雑誌を読んだりし、やっと資料をみつけた生徒も、十分足りたのは4%で残りは不満に思っている。辞書体目録があるが半分は直接書架でみつけたもののみですませ、目録をひいた87名の生徒の内訳は、著者18名、書名51、件名39（一人でいくつもひいたので数は多い）となっている。少ない資料をむだなく利用させるには、件名目録をしっかりとる必要がある。

半数近くの生徒が公共図書館を利用している。今年入学した生徒にも中学校での公共図書館の利用をアンケートしたところ半数以上が経験ありと答えている。公害関係の資料などは、公共図書館の方がはるかにそろえていると思われるので、日頃から緊密な連絡をとることが望まれる。

いよいよまとめの段階に入っても、どのようにレポートを書いたらいいのかが分らない。レポートの書き方を教わったと答えている生徒のほとんどが中学校の理科・社会科の先生と言っている。5%とは驚いたが、そうした現状を知らずに、色々な教科が我も我もとレポートを課し、出て来たものが、ほとんど百科辞典の丸うつしで読む気もしないという教師の批判こそ反省されるべきではないか。図書館の利用指導の中に「レポートの書き方」を入れることは、練習のための練習のようになって難しいが、どうしても必要になってきている。

ま と め

以上が、本校の生徒のありのままの姿であり、他校と比べてはいないが、そう特殊ではないと思う。このような現状をふまえて、図書館を荷負う職員のあるべき姿は

統計から見た学校図書館

何か、図書館の利用指導はどうあるべきかを考える必要があろう。比較的多くの時間をとっている本校でも、1、2年を通じて1クラスに6時間しか時間割に組めず、しかも第1回から2回目までに何カ月も間があったりしてその間のつなぎに頭をいためている。6時間の内容は、

- 1時間目：オリエンテーション：入学時、スライドを使って、本校図書館の利用法を説明。全員貸出しをし、高校に入ったばかりの意気込みのある時に1冊読むと同時に貸出し手続きを覚えさせる。
- 2時間目：読書について：1年生の5～6月にかけて「本」という自作のテキストで、読書の必要性と、選択の時に参考になるものを紹介。夏休み前に、読書計画をたて、夏休みあけに、そのうちから形式も自由にして読書ノート（感想と限らないで）を出させる。
- 3時間目：資料の検索：1年生の10月。分類も目録もとってない新刊を1人1冊与えて、本の取り扱い方から、分類、目録との関係を、実習を中心に興味をひくようにする。
- 4,5時間目：参考図書の利用：1年の2月。2時間つづきの時間にし、こちらからテーマを用意し、又自分でも疑問を持って来て、3冊以上の資料を使って調べ、それぞれの特徴を知ると同時に、1冊の本では、いかに誤った情報を得てしまうかも体験させたい。互いに

発表させ、色々な参考図書のあることを知らせる。

- 6時間目：レポートの書き方：2年生の5～6月。今までは「レポートを書く前に」としてあるテーマにそっていかに資料をさがし書誌をつくるか、までにとどめていたが今後は、レポートの書き方まですすめたい。

図書館では個別の指導が何といっても中心であるが、図書館に来ることにさえ抵抗を感じる生徒、読書のよろこびを見いだしていない生徒などに、色々な機会をとらえて手をさしのべることも必要だと思う。

司書教諭の仕事は無限とも云える程ある。整理業務を経験しないでレファレンスが出来るはずはなく、一つの教科に属しては偏りが出たり、又時間的にも無理があろう。高校を出て、大学に入って学問研究するにも公共図書館や、専門図書館を利用していくにしても、この時期の図書館体験（図書館がどんなに利用価値のあるものかを身をもって知らせる）がその人の一生に大きく影響すると考えられる。その意味からも学校図書館にこそ、有能な司書が置かれることが望まれる。その司書は他の教諭と対等に学校教育全般にタッチ出来るだけの高い資質と身分が要求され、教師や生徒の要求の多岐さからも、複数配置がどうしても必要になってくる。

以上、20周年記念研究発表会の席上「学校図書館の諸相」として発表したものに少し手を加えてここに述べ、皆さまのご批判をいただければと思う次第である。